

## <ワン・ポイント・レクチャー> “いのち”を紡ぐコース

### 第8回 生・死学事始め④:死すべきものとして生きるとはどのようなこと？

人に限らず、すべての生きとし生けるものには必ず死が訪れます。それ故に、今を精一杯生きることが大切であるという内容のお話しをし続けています。

生を与えられたその時から、死を迎えるその時まで生き切ることこそが“生きる”ことの目的であり最も大切なことではありますが、生きることの意味や生きることの価値については、最初から決まっているわけではありません。そのため、一日、一時でも長く生きていくと、「こんなに苦しい、辛い日々ばかりなのに、こうして生きなければならないのは何故なの？」と疑問に思うようなことを経験することが多くなります。

ただ一つ言えることは、“生きている”からこそ自由に振舞うことが出来るということです。たとえばタバコを吸ったり、パチンコをしたり、そんな社会に役立ちそうで無いことであっても、自由だからこそ出来ます。

もちろん、社会生活を送る中であっては、自由には必ず束縛・制約・限界が伴います。人を傷つけない、人を害さないというものであり、それを守る限りにおいては、人はそれぞれ自由に振る舞いながら生きることはできます。しかも、この自由な振る舞いを通してこそ一人ひとりの生きる意味や価値が生まれてくるのですから、やはり一日一日を大切に生きることが望まれます。

私たちは、一人ひとりが特別な価値を創り出す存在であり、その価値を誰かが代わりに創り出すことはできません。その意味でも、一人ひとりとは代替不可能な、かけがえのない存在です。それ故に、一人ひとりの人生には、それぞれの特別な意味がこもっています。

簡単に言えば、人生とは、生きること、生き抜くことを通して、自分だけの特別な意味・価値を作り出すプロセスのことで、そこに自分だけの輝きが生まれると思います。しかも、それは自分だけの輝きで済むのではなく、自分につながる様々な人にも光を当て続けるといった、自他にとって非常に意味のある輝きでもあるのです。これこそが、“生きる”ということの意味にほかなりません。

因みに、明治時代末に青鞥社を結成し、女性解放活動家として活動した“平塚らいてう”が言った「元始、女性は太陽であった」という言葉をご存じでしょうか？天照大神は女性神であり、それを崇めていた天皇をはじめとした当時の国民が男性に比べ“女性”を下に置いていることは間違いであるということを主張していたとかいろいろな解釈があります。自説ですが、らいてうは、自立した恒星である太陽とそのその存在を知らしめるにはすべてを太陽の光に委ねざるを得ない月とを用い、自ら輝きを発することができる存在としてみなされていない当時の女性の生得的な権利を主張したものだと思っています。

残念ながら、女性軽視の風潮は未だに根強く残っているように思います。もちろん、LGBT に対する偏見は言うまでもありません。

社会を構成するとともに人の歴史を連綿とつないでいくためには、すべての人間がそれぞれの価値を、また他者の価値を尊重することが絶対不可欠であると思います。その意識・認識が社会全体に行き渡ってこそ、“生きる”ということを一人ひとりが大切にすることができ、人生の終焉に向かって生きることが出来るようになるのだと思います。